

---

NOW Lording.....

山原青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N O W      L o r d i n g . . . .

### 【Nコード】

N O 9 0 1 X

### 【作者名】

山原青

### 【あらすじ】

主人公は平凡な高校生。

名前は山原蒼樹。

蒼樹は頭、運動神経は平凡の一言だった…。

だが一つだけ本人が胸を張って得意、好きと言える物があった。それはゲーム。

その中でもRPG。だが、最近になり、唯一生きがいだったゲームでさえも、退屈さを感じずにはいられなくなっていた。

そんな蒼樹はある日、あるゲームと出会った事でその人生を一変さ

せることになる。それはまるで…御伽の世界の様だった……。

VRMMOです。暇潰しにご覧下さい。基本は投稿遅めですが、読者様のお気に入り登録などで執筆スピードも変わります。

## 零話

まるで光の束だった。相手側の魔術師の部隊が放った超高密度の極太レーザーが容赦なしにプレイヤーのHPと共に地面を削っていく。

運良くパリイ出来た者や、光線の間を陣取っていた者。その各々が、その威力を前にして防御ブーストを掛ける。

だが、パリイでもなく、運良く当たらなかった訳でもない者がここにはいた。その男は盾を持ってなく、先程いた地点では間違いなく集中砲火を受けていた筈だ。

だが、男は、避けていた。

およそ、人体の回避スピードでは越えられない壁をその男はアツサリと踏み切った。男は尚も、稲妻の様に屈折しながら、ありえないくらいのスピードでダッシュすると、颯爽と敵陣に切り込む。

背中にある可変式大剣を鞘から一心に引き抜くと、それを魔術師部隊の隊長と思われる男の首元に目掛けて薙ぎ払った。

目を見開き、触媒である杖を振ろうとしたが、それは間違いなく遅過ぎた。

自身のアバターに攻撃された事により、男は悔しそうな顔を浮かべたまま、その首を転がした後、ガラスが砕ける様な音と共にポリゴンを散らした。

それに一瞥もくれる事なく、全身黒ずくめの男は大剣を振り続ける。

慌ててガードするが、その杖を巻き込んだままトラックと衝突させた様な轟音と共に、10m程吹っ飛ばされる。結局その時の落下ダメージ+吹っ飛ぶ勢いがボーナスで早計され、多大なダメージを受ける。

衝撃マヒでアバターを動かす事の出来ないそのプレイヤーを男は容赦無く斬りつけた。

「魔法隊は制圧したぞ！第二大橋から、キャッスルに乗り込め！」

プレイヤー達を引っ張る役柄である大男が、意気揚々と公言する。

大勢のプレイヤーが一点に向かおうとするが、その梓にはまらず黒ずくめの男は、移動ブーストをかけて、脱出経路を封鎖するべく行動する。

移動中に腕を振ると、ウィンドウが表示され現在時刻が脳に直接入り込んでくる。

21時40分……。

男は再度剣を鞘から勢いよく引き抜くと、逆手に構えて、アビリティを発動させる。

秘密脱出経路である、階段横の布が破れると大勢の敗戦国プレイヤーが雪崩出てきた。

そこに向かって剣を振ると、黒い雷を纏う斬撃が、高速で剣から打ち出される。

プレイヤー達は気づく事も叶わず直撃し、煙が上がった中でHPバーをゼロにした。逃げてきたのは王室プレイヤーばかりだったからドロップ品も、経験値も桁外れだった。

男はもう一度時刻を確認すると、自国へ戻る為に『<sup>London</sup>神の案内』と表示される高価なアイテムを使用する。

体の横に出てきた扉を開けると、男は吸い込まれるように闇に体を溶かした。

。  
。  
。

向かっているのは、パーティーメンバーが揃う酒場だ。昔の俺ではこうはならなかった。馴染みと会うのに途轍もなく楽しみにしている自分がいる。

ついつい笑みを作り、明日が休みだと気付くと、今日もどんちゃん騒ぎだろーなと呆れながらも、心はドキドキと高なり、それが回転が遅い脚を急かすようだ。

ついに酒場の前に立ち、時刻を確認する。

21時55分。

俺は勢い轻めに、ドアを開け放つ。その瞬間、変な感じがした。

酒場は真っ暗で何も見えなかった。だが、ゲーム内での夜の光量では表せない程の黒だという事は分かる。

そう、電気がついていないのではない。真っ黒なのだ。

俺が言いような不安感を感じていると、一瞬にして、酒場に光が灯る。仮想とはいえ、俺は眩しさに目の前に手を翳す。

そして耳に届く破裂音。

パン！パ、パン！

それはクラツカーの音だった。

「……誕生日おめでとう！」「……」

「あ？はい？」

どうぞ、と渡されるクラツカーを訳も分からず放射する。呆然としている俺を見て、一人の女が俺の顔に目一杯顔を近づけて言った。

「まだ、わかんないの？」

… ああ、そうだ。

今日は俺の誕生日だった。

酒場には四人の男女が集まっていた。四人とも間違はなくこの所、毎日顔を合わせてるメンツだ。

「ソウマはどうせ、自分の誕生日すら忘れてるだろうからってね。皆でサプライズパーティーをやるって事にしたんだ。」

話しかけてきたのは俺の最も大切な人である、超絶美顔を目の前に掲げるイルという女の子だ。

「泣け、泣け……!」「今の心境は!?!」

俺は何も言わずに目に浮かぶ雫を悟られぬよう目の前のイルに抱きついた。

「「おお!」「」

(こいつらは、本当に……………)

イルが背中に回してくれた手。

仲間が肩を叩く手。

俺の頭を撫でる手。

酒を俺に渡してくる手。

そのどれもが全て限りなく暖かくて、俺は一人、こいつらの事を大切して行こうと誓いを立てた。

そう誓った筈だった……………。



始まり

ロード中…ロード中…

テレビ画面に映る文字を虚ろな眼で見ながら、俺は傍らに置いておいたペットボトルジュースを手に取る。

キャップを開け、中身を口から流し込むと、それまで乾いていた喉に潤いが戻る。

俺は、ゲーム機のコントローラーを素早く操り、キャラクターをセーブポイントに移動させる。

セーブ完了の文字が出ると同時に、ハードのスイッチとテレビの電源を消すと、画面は今まで眩いばかりの色合いを見せていたはずが、何も映さぬ漆黑に変わった。

今日は朝早くから学校がある。

コントローラーを投げ捨て電気を消して、ベッドに潜り込むと、俺は直ぐ様寝息をたてはじめた…

。 。 。

ピリリリ

携帯電話のアラーム音が、大音量で部屋の中に木霊する。

朝一番に耳を痛めつけられた事に少々のだらけを感じながらも、俺は軽く手櫛をしたままの手で、携帯電話の目覚ましを停止した。携帯電話の画面から得られる情報によると、時刻は7時30分と、

現役高校生が起きるのに相応しい時間だった。  
俺はクローゼットに立てかけておいた制服を取ると、素早く着替え始める。

寝巻きを放り捨て、今だに睡魔を加速させる眼を擦り、部屋の外へと繋がる扉を開いた。

水道で顔を洗い、リビングに足を向けると、朝に似合った良い香りが俺の鼻を通って脳に信号を伝え、食欲を発生させる。

「あ、やっと起きたの？朝ご飯用意してあるわ。さつさと食べなさい。」

俺は母親に軽く返事をして、椅子に座ると、貪る様に朝食を平らげていく。今日の朝食はウィンナーエッグにサラダだった。

パンにバターを塗りながらも、他の物を詰め込んでいく。  
最後のウィンナーを箸で落とさない様、器用に摘み、今だに色々な食材が混沌と混ぜられている口の中に勢いよく放り込む。

パリパリと良い音がして、口の中にジューシーな肉汁が広がる。

俺は満腹になった腹を軽くさすりながら、大きめのコップに牛乳を注ぎ入れる。

今日は朝から暑かった。そのせいか、冷たい牛乳が体の芯から冷やしてくれる。

俺は鞆を肩にかけ、今日も学校へ向かうため、革製の靴を鳴らす

。。  
。。  
。。

県立星恭高校…。

他の高校と比べても何ら遜色のない、ありふれた公立高校。

ここで約500名の生徒達が日々勉強、スポーツ、はたまた恋愛に喧嘩… 青春を満喫している。

俺はいつもの様に下駄箱に靴を突っ込むと、踵が踏み慣らされた上履きを床に置く。

自らの教室に向かうため、階段を四苦八苦しながら登る。教室は三階にあり、毎朝登るのには良い運動だ。煩わしい鞆を持ちやすい位置に調整し、息を僅かに漏らしながら足の上下運動を行う。

俺の教室は今年の春からこの高校の1年2組だ……。

。 。 。

三階に到達すると、ガヤガヤと同級生の声がうるさい。俺は耳を塞ぎたい衝動に駆られながらも、息を整えつつ自分のクラスに入っていく。

クラスは36人構成の普通なものだ。現在教室には、半分程の人数が登校していた。

部活や係りの仕事などを率先してやっている人もいる訳だから、この人数は普通と言えるだろう。

現在8時15分程……。

俺は教室に設置されている時計を見るのを止め、授業を受けるための席に、真っ直ぐに歩行進路を設定した。

鞆を肩から降ろし、机の横に引っ掛けると同時に、俺の耳に聞き慣れた声が響く。

「今日も朝から眠そうな顔してるね。夜遅くまで勉強でもしてた？」

俺は視界をそっちに向けるのも面倒なので、顔を見ないで返事をする。

「新作のゲーム。RPGのやつ。勉強なんかするかよ。」

「ああ、あのCMで派手に宣伝してるやつね。やったの？」

「ついさつき終わらした。ありゃハードの性能に頼り過ぎだ。画質と迫力で誤魔化してんな。内容ありきたりだったし、正直微妙だった。」

俺は頭を掻きながら盛大な欠伸をし……ようとしたが、なんとか堪えた。

どうやら午前5時まで働いてもらった俺の両目は、とても授業なんて受けれる状態じゃないらしい。

「へえ、でもいつもそんな事言ってるよね。山原って実はゲームそ

んな好きじゃないんじゃない？」

やまはら せうじ  
山原蒼樹

俺の名前。

「知らねーよ、そんなの…。」

俺は鞆を漁り、朝学校に来るついでに買った、カフェオレを取り出す。

同じ袋に入っていたストローを器用に片手で取り出し、握って机に軽く叩きつける事で封を開ける。

紙パックを開けると、そこに長めのストローを差し込み、口に咥える。

「知らねーって…じゃあ何のためにゲームばっかやってんの？」

俺はストローから口を離し、朝から全くもって会話をしたくない奴と向き合う。

「好きだからだよ。…作品がどうかじゃなくて…。てかお前に言っても、無駄そうだからいいや」

俺はため息を尽くと、再びストローを吸い始める。

「無駄とはなんだー。無駄とは！」

ああ、うるせーうるせー

「こちとら、朝まで趣味に没頭してたおかげで、眠いんだ。カロリーメイトやるからあっちいけ…。」

メイプル味のカロリーメイトを差し出す。

「ウチは、ガキか？…まあ一応貰うけど…。」

異常にテンションが高い、俺の隣人は今日も同様にウザかった…。

俺は一度携帯を確認すると、そのまま鞆に放り込む。飲み終わった紙パックは元入っていた袋に無造作に突っ込み、これも同様鞆に入れる。

俺はやる気を感じられない体に少しでも力を取り戻そうと、睡眠を与えることにした。

腕を枕にして、顔をうずめる。かろうじて抑えられていた眠気が一気に俺の瞼を下ろす。

一時間目……数学？英語？……どうでもいいか…。

俺は眠る。



## 第一話（前書き）

m 誤字、脱字、ご感想などがありましたらお願いします m（――）

## 第一話

授業も終わり、教師の無駄に長つたらしい話も聞き終え、今は下校中だ。

時計の針が4の数字を刺す少し前、特にやる事のなかった俺は帰るついでに行きつけのゲームショップによって行く事にした。

それもこれも、正直これといって仲が良好な奴は俺にはあまりいないからだ。クラスの奴らは仲が悪いとは言えないが、一概に良いとも言えない。

暇があれば話すし、たまには一緒に出かける事もある。

ふざけ合ったりも普通にする。

だが、友達とは言えない。

知り合い以上友達未満…といったところだろうか。こう考えると友達の定義は難しいと切実に思う…。

まあ、とにかく何が言いたいかというと、放課後進んでつるむような奴はいないって事。

あの女？ハハ、名前も知らねーよ。

その、俺は友達がいなかったという事を、回りくどく説明したわけだが…  
つと…

店に着いたか…。

この理由もまた今度。

俺は目の前にそびえ立つ小型のゲームショップを見据える。

扉の前に立つても自動で開いてくれない所を見ると、旧世代の手動式ドアだと言う事が分かる。

2050年にもなって“これ”を使ってる所はそうはないだろう。

俺は取っ手を力いっぱい握り、体重と筋力を総動員させて開けにかかる。

このドアは重さも並じゃない…。

フーフーと走った後のような状態をキープしながら俺は店内へと歩を進める。

「いらっしやい……ってお前か。」

綺麗にブリーチした短い髪の男は俺の古い馴染みであり、数少ない友人の中の一人だ。

「お前かって何だよ…一応客だぞ？」

俺は労働させられた事により、少々の悪態をつく。

「今更そんな仲じゃないだろう。それにお前に敬語はなんかムカつく。」

カウンターの内側にあるゲームの宣伝ポスターを貼り直しながら、店員らしからぬ発言をする。

この男の名前は長田遊星。

こいつとは、小学校の頃からの付き合いであり、高校で離れたが、今でも恥じらいを捨てれば親友と呼べる奴だ。

「こつちも気持ちわりいよ。それより、クリアしたぞ。」 mono graffiti”。クリア後の裏チャプターの数は8個だった。それと、バグはいつになっても残ってるな…」

俺は鞆から表紙が多色のカラーリングで塗りつぶされている箱を取り出す。それを親指と人差し指で掴み、ヒラヒラと掲げると、遊星はハアとため息をつき、それを受け取る。

「マジかよ…まだ発売して3日だぞ…。で、どうだった？」

「流石に“Repran”の作品には及ばなかったが、まあ、楽しめたさ…っつーのは建前…正直ストーリーとかも微妙だったし、意味の分からんミニゲームとかも中々ウザかった…多分、少ししたら叩かれるだろうな。」

“Repran”…元々、大手資産持ちのゲーム企業会社とアメリカの電子機器精製会社が合併して作られたかなりの有名会社だ。

俺も一度Repranの作ったMMOを物は試しにとやってみた事があったが、見事にはまった。

内容は、出身国を選ぶ事で、魔法が発達している国か科学が発達している国かが分かれ、その国に戸籍を置きながら、モンスターを殺したり、プレイヤーを殺したり、城を壊したり、車で突っ込んだ

りとかかなり自由度が高いゲームであった。

基本的に俺はイベント形式で物語がどんどん進行して行くようなモノが好きで、自由度が高く、終わりが見えないネットゲームはすぐに飽きが回る事からあまり好かなかった。

だけどそのゲームは違った。まるでプレイヤーの望む心をコントロールしているかのように、アップデートでの追加要素は立ち回る”俺達”を飽きさせる事はなかった。

「あ、そういや、Repranといえば、いい情報があるぞ？酒と菓子ぐらいならあるし、俺の部屋行くか？」

遊星が前掛けを脱ぎながら、俺に一つの提案をする。平凡高校生の会話に”酒”、俺とこいつの関係性、味覚年齢がわかってしまうからいただけない。

「ああ、そうだな。じゃあちよつと寄って行くかな。」

でも断れないのが俺だろう。まあ、多分大丈夫だと思う。あいにく酒の匂いに気付く程、俺に近づく奴などいないのだから。

俺は笑う。自嘲気味に、微かに。

親父さんに店番を任せると、階段を上がって行く遊星の背中について行く。

。 。 。

「で？Repranの情報って？」

俺は昔から変わらず日本国民に愛されている例のスナック菓子の  
うす塩味を、パリパリと音を立てながら食べる。

台の上に缶ビールの空き缶が並んで二本ずつ立っているところを  
見ると、弱いならば、既に出来上がっている頃合いだろう。

だが、俺と遊星は元来強めのようで、アルコール度数7%くらい  
なら何本飲んだところで、ほろ酔い程度になるのが関の山だ。

一度、泥酔いしてみよう、と言う事になり、どこから持って来た  
のか、ビールからテキーラ、スピリタスまでもが俺の部屋に用意さ  
れた事がある。

因みにスピリタスはアルコール度数96%の酒と言っているのか、  
薬品に使われる事もある、まんまアルコールの飲み物だ。

機会があつたら……飲んでみるといい……。

その時の事はよく覚えていないが、泥酔いは出来たと言う事と、  
半端じゃない程楽しかったという事は少しも霞まず、俺の脳に張り  
付いている。

因みに朝起きた時、俺は遊星と一緒に肩を組みながら半裸の状態  
で、冷めた風呂のお湯に浸かっていた。

地獄絵図だった。

思い出したくない事まで思い出してしまった。

俺は一気に缶ビールを煽る。

「聞きてーか？」

遊星がタバコの先端を向けながら言う。副流煙がエアコンの風でモロに俺の顔面に吹いてくる。

「もったいぶんなよ？早く教えろよ？」

正直、遊星のゲームショップの息子という立場はいい。ゲームの情報がかんりの頻度で流れてくるのだから。

多分、その情報もかなり後に公開される物だろう。

期待し過ぎるとろくな事が起きない俺は、期待半分、失望半分のスタンスで話し始めようとする遊星を見る。

「実はな……VRHWで、初のMMOが出る。」

遊星の言葉に俺は一瞬心臓さえ止まったんじゃないか？と思える程の硬直をした。

だが、まだ聞かなきゃならない事がある。俺は震える口をどうにか、アルコールで誤魔化しつつ、冷静に問いかける。

「…そ、それにRepranと何の関係がある？」

正直言ってしまうと、その時の俺はもう遊星の言わんとしている事に気づいていたのかもしれない。

「そのMMOがな……Repranの作品なんだよ。」

俺は内心の興奮を隠せぬ様に、遊星に詰め寄った。発売日や、運営側の企画者。値段に力の入れよう。これが酒が入っていたからなのかは知らないが、確かに俺の体は一度死にかけた興味を蘇らせていた。

「しかも多分失敗はないぜ。何と言ってもRepranのFair y Land Online（FLO）のリメイクらしいからな。」

遊星がニヤリと笑うと、とんでもない事をさらりと告げる。FLOとは、さっき言っただろうが、Repranの代表的なゲームだ。

俺が唯一本気ではまったMMO。

俺は高ぶる思いを抑え、痺れた脚の位置を変えながら飲みかけの缶に手を伸ばす。

残念ながら缶ビールじゃ酔えない。でも、今はそれでよかった。

何せ、俺が缶ビールで泥酔いできてしまったら……俺の意識がはつきりしていなかったら……たちまち、この情報は夢の中の物になってしまいそうだったから……

俺はニヤニヤと上機嫌のまま、強めの炭酸を喉に通した。



## 第二話

VRHW。

(バーチャルリアリティハードウェア)

2045年になり、科学の最先端に行くハードが発売された。ゲーム機でありながら、399GBの容量を誇る、最新式だ。

今のゲーム機では、コントローラーと3Dタッチの応用、画質の進化や世界のネットワークへの接続が可能になっている。

今では仕事でさえもゲーム機で行える時代である。なので一概にたかがゲーム、と罵る事は出来なくなつた。

これがPFGI・1089の本質だ。

3Dタッチ。これは画面に細かで特殊な蛍光板のパネル粒子を搭載する事で、スイッチ一つで文字が浮き上がり、それに接触する事で、距離計算と、温度探知でハードにデータを送り込むという物だ。そのパネルや科学物質の完璧なる統合に苦戦し、開発発表は2040年まで持ち越されていた。

細かい事はよく分からないが、他にも問題点は多かつたらしい。

初めてはパソコンで行われた。当時は高価で取り引きされており、持っている人は、収入がいいか、ボンボンかの二択であつた。

それが近年になり、安価でいて、色んな物に適応される事となつた。

その中にゲームもカテゴリーされているというわけだ。

そして、近年。

1947年。

ゲーム会社が前代未聞の発表をした。  
バーチャルリアリティハードウェア  
VRHW

これは最初、裏で医学や、軍用、はたまた、痛覚遮断を目的で作られた、仮想世界シミュレーション機器である。

フロントカバーの付いた、ヘルメットのような物で、それに付いてる電極を指定された場所に装着する事で、準備完了だ。

これが発売された当時は世間で大いに騒がれた。

脳にアクセスするのだ。問題は無いのか？

値段は？容量は？

だが、そんな奴らの期待に背を向けるかのように、同時に発表された事実。

VRHW初のソフトはなんでもないただの、一人で遊ぶ、ゴルフやテニスと言う物だ。それに、遊ぶためには、役所に行き手続きを済まさなければならない。

それでも買う奴はいたそうだが、やはり、それでは若者の腹は満たされない。

今では電子機器の何もかもが、3Dタッチだ。学校の黒板に、感度のいいデスクパネル。

当然ゴルフやテニス、野球にサッカーだって走る事は出来ずとも、蹴ったりは出来る。

それに、リアリティもある。

なのでVHは発売当時売れ残りが溢れた。

それに、危機を感じた企業が抽選で出したり、格安で販売したりした。

流石に持つてる人は増えたが、やはり、ソフトなどは売れないようだった。

ソフトはやらないのに、ただただアップデートを繰り返して行く、そんな意味の分からない事が起き、ネットでも騒がれていた物だ。

だが、ついこの前。

VRHWの全機、同時オンライン接続が開始された。

持っている人は皆一様に、今更何故？と思ったはずだ。

なんせ俺もその中の一人だったのだから。

わけが分からず、混乱しながらも気にしない人たちの他にネットではこんな事が騒がれた。

ただのオンライン接続ではない。VRMMOが発売されるのではないかと。

そうしてネット上で、騒がれていた都市伝説は……

今日6月中旬、大手ゲーム企業。

”Repran”の新作ゲーム発表により、真実となった。



### 第三話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などがございましたら書いて頂ければ光栄です。  
m ( ( m

### 第三話

今は授業の合間だ。

俺はいつもの様に椅子に気怠げに腰掛けると、黒色のスクールバツグを漁る。

家を出る前に乱暴に突っ込んだいた携帯を探すために、ガサガサと朝から元気一杯に腕を動かす。

指先に携帯端末の冷たさを感じると、俺はキーホルダーなどのストラップはつけておらず、遊び心のないメタリックブルーを取り出す。

今の”携帯端末”は昔に比べ、随分と種類が多くなった。

それも、TPPによる会社の激的な増量によるところだろう。

関税の掛かりの緩い商品は、出入りがスムーズになったし、何より、輸入輸出の頻度が昔より断然多い。

その甲斐あって、外国企業の伝染や、日本企業の進出などで、国々による全体会社数が圧倒的に増えた。

今では”携帯電話”と言っても、電話やメール以外に使う事が多くなり、今では携帯端末と呼ばれている。

まあ、略せばどちらも”携帯”なのだから、後の四文字、三文字は別に関係無いと見て大丈夫だろう。

俺が携帯端末の開帳ボタンを押すと、途端に不規則に折りたたまれたパネル一つ一つが動き、その液晶画面を露わにする。

素早く入力をこなすと、携帯端末の液晶画面がホーム画面からイ

ンターネット接続画面へと、早々と移動する。

俺は検索ワード入力欄に、楽なアルバイト、と入れると、暑苦しくなってきた制服の袖を大胆に捲る。

そうして、大抵見つからない様な調べ物をしながら、俺はボケーと休み時間を浪費していた。

「なに調べてんの？」

これは暇な時間を過ごしたくない隣人が堪えきれず、俺に問いかけた言葉だ。

俺が首を持ち上げ、そちらに視線を送ると、何に対してか、首を傾げる隣人。

「アルバイト。」

俺が簡潔にその答えを示すと、面倒くさい感じに身を乗り出して画面を覗こうとする隣人。

隣人隣人言ってるが、本当に名前がわからないのだ。

多分これが俺のコミュニケーション能力の低さへとそのまま直結しているのだろう。

じゃあ、仮にこの女は山本さんにしとこう。

「何で？」

こっちは親切に教えてやったのだから、その答えぐらい自分で考えろ。と言いたくなるのは間違っているだろうか？

アルバイト。と答えたら金が必要、以外に何の理由があるのだから

うか。

実際に友達が作りたいやら、彼女彼氏が欲しいなどという理由でバイトを始める程酔狂な奴は現代にはいないと思う。

だから、俺は山本の何で？と言う質問に対して、何で？と聞きたくなった。

「金が必要なんだよ。それ以外に理由あるか？」

画面をスクロールさせながら適当な声色で返す俺。この態度はあつちに行け。という意味表示にちゃんとなってくれてるだろうか。

「まあ、そうだよな…。あつ！そっいえばウチが今バイトしてる店、他にも何人が雇いたいとか言ってたよ？」

どうやら、俺の必死の懇願はなんの意味もなさなかったらしい。だが、その代わりに何か美味しい話が目の前にある気がしてならない。

「時給は？てかどんな仕事？」

インターネットでもしつくりしたのがヒットしていない俺にとって、こういう話は歓迎の一言だ。

「ファミレスだよ。Pukka。」

Pukkaとは、その店品の完成度の高さから結構な人気を誇る、今日日本でチェーン店の多さが上位にランクインされているファミレスだ。

因みに読み方は”プッカ”だ。

「へえ。時給どんぐくらい？」

俺が聞くと、ニヤリと笑ってトコトコと俺に近づいてくる山本。一瞬身構えたが、どうやら、耳打ちするための行動らしい。周りにいる奴はそんな気にするほどでもないと思うが、まあ俺はそれに従う。

そして、鼻に伝わる女子高生特有の甘い香りとともに、耳に伝わる吐息。

少し柄にもなく緊張したが、気にせず耳から伝わる情報を脳に伝達する。

「――。」

「……決めた…… P u k k a で働く。」

俺の耳が聞いたのは、高校生には少々刺激が強いのではないかな？ と思える程の金額量だった。

「フフ、じゃあ店長に言っとく。」

人付き合いがこんなところで役立つとは思わなかったが、俺は今でも変わらず使われているお礼の言葉を精一杯の感謝を込めて、目の前の女子に送る。

「ありがとうございます。山本さん。」

敬語を使う事など滅多にない俺だ。おちよくってる様に聞こえるが、本心はそんな事は無く、感謝でいっぱいだ。

俺が言くと、何故か微妙な表情をしたまま、山本は俺の顔を見る。

「山本って誰？」

そりゃそうだ。

と思いながらも、俺は必要の無くなった携帯電話にお休みを告げるかの様にスイッチOFFのボタンを押した。

#### 第四話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などございましたら頂けると嬉しいですm  
— ) m

## 第四話

俺は今バイトを紹介してくれると言っていたクラスメイトと県の大街道を歩いている。

ソーラーパネルを搭載したエコカーがアスファルトを踏み鳴らし、大気を受けながら静かな進行をしている。

俺は自分の情報の記された履歴書を持ち、未だに名を知らないクラスメイトに付いて、バイト志望のファミリーストランに向かう。

それにしても電話もせずに人伝にいきなり面接とは、切実に店長の性格を示していると見える。

何故この女と一緒に歩いているかという、なんでもない、携帯の電池が切れていたからである。

これだけ聞くと訳がわからないが、過程を話すとこんなものだ。学校帰りにバイト先へ向かおうと思い、場所を調べようとしたが、携帯は充電切れ。

家に帰るのも面倒くさいなあ、と思っていたら、この女が話しかけてきたのだ。

バイトの面接はいつ行くのか？といった様な質問だったと思う。一文字一文字、照らし合わせば多少の誤差はあるだろうが、まあ、そんなものだ。

そこで俺は何となく、気軽にこの女に事情を話した。別に特に隠す事でもないと思ったし、この状況を打破するのにいい策を提供してくれるかと思ったのだ。

そしたらこの女は言ったのだ。

「だったらウチについてくればいいじゃん。あたし、今日入ってるし。」

それからこの様な状況になった。

同じクラス、名前も知らない異性と一緒に

夕日が薄赤く照らす道を歩く。

バイト先は思ったより近くなく、無言の状態が続くのはあまり、精神衛生上良好ではないので、暇潰しがてら会話を試みる。

「なあ…。そういえばお前名前なんていうの？」

デリカシーの欠けさに驚いた。最早欠けてるを通り越して碎けると言っても過言ではないだろう。

なあ、の後に何か気のきいた事をいうつもりだったのだが、自分で名付けた山本という謎の二文字に若干影響された感があるのは否めない。

「え？ウチ？…伊藤瑠璃香だけど…ってそうじゃなくて！何！？ウチの名前知らなかったの！？」

喚きながら虚しい事実を自ら知ろうとする伊藤瑠璃香。

それにしても山本は一字も合っていなかったらしい。合っていたところで、別に嬉しくも何ともないのだが…。

堂々と間違っていた事には少し謝りたい。

すいませんでした。

これも心の中だけの思想謝罪だが…。

「へえ、瑠璃香って結構珍しい名前だな？」

俺はめげずに伊藤のツツコミをスルーしながらも会話の続行を図

る。

「え？まあ、でも蒼樹も十分に珍しいと思うよ。」

「そうか？」

「うん。」

会話終了……。

それにしても折角、もつと繋がりそうだったのに、うんって返したら終わるのは目に見えてると思うのだが…。

もしかしたらこの伊藤という女は俺とあまり、話したがっていないのかもしれない。

まあ、それもそうか、と妙に納得してしまうが。

前も言ったとおり、俺はあまり、友達がいらない。それで悲しかったりはしないので、他人にも友達がいらないという事を大らかに公言出来るくらいの心の耐久度は備えていると見える。

俺が考え事を始めた事で途切れた会話を修正するために、伊藤は新たな話題を提示する。

「そつえばさ。何にお金が必要なの？」

俺に必要なのは、理由は一つしかないと思うが。

「ゲーム…」

俺が言うと、一気に肩を落とす伊藤。

口からは「まあ、そうだよ…」と言う声が俺の耳にストレートに届く。

俺は、当たり前だろ？と言いたくなる舌を誤魔化して、今懇願しているゲームについて説明する。

「なんたつて、VH初のMMOだ。買う他はねーだろ？」

俺は、普通は買うだろ？と言った様な心境を見せつつ、”それ”の高性能さをアピールする。

「免許も持っていないやつが、車に乗れんだぞ？仮想五感は現実には近いつて噂だし、高級料理だつてゲーム内ならタダで食える。」

「それだけ聞くと凄そうだけど…」

「お前も買え…」

「は？」

「どうせ、ジャスターやつてたならVHぐらい持つてんだろ？」

ジャスターは完成度は高いが、何故か人気が無かった残念なRPGだ。

全体的に生産数が少かったのも関係しているが、専用ハードの人気のなさも関係していただろう。

だが、意外にコアなゲーマーには好かれている隠れネタゲー。

「いや、まあ持つてるけど…」

「頼む。」

俺は、街道を歩く他の人々の目線も無視して、同級生の肩を掴みかかり目を真っ直ぐに射抜く。

この状況を第三者が説明すると、青い服の秩序を守る正義集団が到来するだろうが、そこは全く気にしない。

「で、あ、い、いいから、ちょっと離れて！」

肩を掴み、しっかり固定している俺を押して距離を取ろうとするが、俺は負けずに同級生に食いかかる。

伊藤は力を目一杯込めてるからか、顔を真っ赤にさせたまま俯いている。

「よくない！お前が買うなら俺はもっと頑張れる！」

MMOのレベル上げは過酷を通り越して、究極マゾヒストにしか通用しない様なパワーアップシステムだ。  
だが、それもパーティを組むやつがいれば格段に殲滅の効率は上がる。

始めるからにはカンストを目指したいと思っていた俺に同業者はとも引き入りたい要素だ。

俺が尚も肩を掴んだまま揺すっている、遂に伊藤は妥協したのか、言うてはいけない言葉を発した。

「わ、分かったから！だから、離して！買うから！」

俺はその言葉を聞くと、あっさりと手を離す。

「マジか！？言ったな？絶対だぞ！？」

「絶対かは分からないけど…ウチも少しは興味あったし…」

伊藤は肩をさすりながら肯定の意を示す。

「悪い。痛かった？」

「え？いや、別に痛くはなかったけど…」

そう言っただけでまだ赤い顔を隠す様に手をブンブンと交差させる。

だが、俺はそんな事氣にならない程氣分がよかった。これで尚更F  
LOへの期待が高まったからだと言える。

それと同時に思ったのは、意外に可愛いやつだな、という閃きの  
理由が押しに負けたという事だけに下らない持論だった。

#### 第四話（後書き）

あれ？VRMMOの話だね？と思った人は申し訳ありませんm（

――）m

そのまま生暖かい目で見ててくれるととても嬉しいです。（^・^）

/

## 第五話（前書き）

感想などございましたら、頂けると作者の執筆スピードUPです  
（ ^ ^ ） o

## 第五話

店の前で、俺は隣に行くクラスメイトに今から面接をする店長の事について質問してみた。

「うーん。まあ変な人かな？」

「なんで疑問系なんだよ…。」

「そんな心配しなくて大丈夫だよ。店長は変人だけど優しめだしね。」

そんなに変人というjobが固定される程の豪の者なのか、俺は心配は別にしてなかったが、新たに興味が湧いた。

ピピ

伊藤の鞆に入っていたプレートはカード認識装置に当てると、音を鳴らし、開くように誘導した。裏口の、関係者以外立ち入り禁止と書かれた紙が貼り付けてある自動ドアをクラスメイトと並んでくぐる。

裏の事務室は意外に綺麗で、少なくともプリント類など、散らかしておいたら汚い、と思われる様な物はしっかり整理整頓されていた。客足の伸びなどがグラフにまとめられていたり、他の店と大差ない事も手に取るようにわかる。

俺は灰色のデスクに置かれた書類を興味本位で、立ったまま見下ろす様に眺めていた。

そんな俺の隣をすり抜けて行く伊藤を見て、俺は事務室の奥へと伊藤に付いて進んで行った。

「店長、前言ったバイト志望連れて来ましたけど？」

奥の扉を開くと、そこに顔を突っ込んで声を上げる伊藤。

今あの扉を閉めたらどうなるのだろうか？と少し危険な思想が芽生えた脳を惑わす様に首の骨を鳴らす。

「はいよ。じゃあ、ちよつと……今手離せないから……よいしょ！  
…ちよつと部屋連れてきて？」

奥の部屋から聞こえた声は、まだ喉の潰れていない店長にしては珍しい若めの声だったので拍子抜けした。だが、奥の部屋で何が行われているのか少し興味が湧くのは、ロマンを求める男子高校生なら当たり前の事だ。

気を使っているのだろうか？伊藤が入って、と言ってニコリと微笑みをくれた。束ねた黒のポニーテールがフワリと揺れ、僅かな香りが鼻腔をくすぐる。

俺はロッカー室に向かう伊藤に小さく礼を言うと、未知の領域に踏み込む為、少しの深呼吸を実践する。そして、俺は滅多にしない真面目顔を作ると面接室に飛び込んだ。

そこには、机と資料の詰まった本棚や、店のトレードマークである簡単なリッチおじさんの絵、ダイエツトムービーを絶賛放映中のテレビに、同種のダイエツト器具であるウエストバンドを巻いたぽつちやり系のお兄さんがいた。

『さあ！リズムを大切にしましょう！脂肪は必ず燃やし尽くせます！』

「フ、フ！フウ！フオ！」

俺は何も言わずに少し汗の臭いが香る面接室の扉を閉めた。

部屋間違えたかな？と思い辺りを見回してみるが、伊藤がさきほど入るよう促していた部屋に他ならない事が分かる。

（えっと……）

俺は落胆も驚愕もする事ができない微妙なダメージを受けた。

確かに変人だった。確信犯だ。俺は嫌なモノを見てしまったなと室内では見えない空を見つめ、とっとと帰ろうかと思案しているところだ。

「いいよ？終わったから入っておいで？」

いきなりひょっこりと顔が出てきたので思わず蹴っちゃいそうになったが、そこはバイト志望という肩書きの元に自制した。

一気に入りたくなかった面接室？に仕方なく一礼して入ると、なるべく変人と顔を合わせない様に指定された椅子に座った。

「それじゃあ、面接始めちゃおつか？」

店長が今まで顔を拭いていた黄色のタオルが首に巻かれた。目の

前にいるのはどうみても久方ぶりに運動したただのDEBUだ。正式にはfatだが…。DEBUと英語で表したのは印象を和らげるためではない、という事を分かってくれとありがたい。

「あの…これ履歴書です。」

俺はたいして敬ってもいないデブ…。…じゃない、DEBUに軽く頭を下げながら自己情報が記された書類の入った封筒を渡す。

店長…じゃない、DEBUがそれをハイハイと言って受け取る。その時に腹が何段にもなっていたのを目撃したのは、忘れたほうが利口だろう。

「うゝん。じゃあね…店の選んだ理由聞かせて？」

俺はやっとこさ、ぼくなって来たな、と思いながらも、来る途中に考えた文章を少し改変して口から吐き出す。

そのまま二、三の質問を受けた。どれも普通の質問ばかりで、腹と変人さは比例しないんだなと頭の片隅で考えていた。

「それじゃあね……………」

DEBUがじーっと俺の顔を見てくる。視線で人を殺すというのはこういう事を言うのだろう。残念なことに視線に込められている感情は殺意ではなく、俺が感じる気持ち悪さだけだが…。

「いやゝ山原くん。君女子にカッコ良いつてよく言われるでしょ？」

突然、全く関係ないにしろ、正直お前が言ったら無視出来ないよ

？と言いたくなる様な怖い発言をした。

「いやゝあまりないですね。」

アハハ、と自分でも凄いな…と思える程の笑い方のうまさが発揮されたのは運が良かったと思う。

最後に高校生になってみてどうだとか。そんな風な他愛もない話をした。その日はシフトの話と認証カードキーの話をしたあと、ごく普通に家路についた。

何故か凄い疲れた……。

俺はフウつと息を吐くと、まだ見ぬ仮想世界突入の日を迎えるために荒稼ぎする決意を固めた。

## 第六話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などございましたら頂けると嬉しいですm  
— ) m

## 第六話

ある日の教室で、俺が眠気と闘う為に現代では珍しい書物を片手に持ち、読破しながら悶えているところに同級生が近づいて来た。

その顔は見覚えこそあるが、そんなに頻繁に見る事のない、いわゆる全く話した事のない梓にカテゴライズされる奴だった。

「おい、アオ！お前ついこの前伊藤さんと駅の所二人で歩いてたろ？」

俺がアオ、と呼ばれているのは、センコーが初めて俺の名前を読んだ時に、パネルに映る平仮名を読まずに蒼樹をアオキ、と読んだのが事の発端だ。

その不愉快なあだ名で俺を呼んだ事に、少し苛ついたが、表情に出す事なく切り返す。

「ああ……で？」

俺は書物を眺めながら隣に立っているであろうクラスメイトの輪郭を感じ取る。

「で？じゃねーよ！お前何だ？……やっぱり伊藤さんと付き合ってるのか……？」

適当に返したが、イトウサン、というのは伊藤さんだろう。興味がない事はカタカナ表記される俺の脳には、今言った通りの負の感情が湧き出てきた溢れそうだ。

興味と面白味が無さ過ぎて眠気を増大させてくれるその話の内容を、俺は入ってくる右耳から左耳に八割をスルーさせていた。

「やっぱりって何だよ。付き合ってねーよ……。てか本人に聞きゃい  
ーだろーが。」

俺は初めて向き合つと、面倒くさい奴に言ってやった。

「本人に聞いたら、言っただんだ。『ご想像にお任せする』ってな。  
」

さすが、俺の面倒くさい奴ランキングの上位に食い込んでるだけ  
はある強者<sup>つわもの</sup>ぶりだ。その点は賞賛しよう。

「なあなあ、ならお前は伊藤さんの事どう思うんだ？可愛いつて思  
うだろ？」

伊藤瑠璃香は意外に人気者だ。活発な感じを思わせる少しのつり  
目とポニーテールに、その誰にでも見せられる整った愛嬌のある笑  
顔。一緒にいると楽しいとの評判もあり、一年から三年までに好感  
だ。

だが、それが俺にも反映されるとは限らない。

そうだ。

言っぞ？

俺は………

「俺は年上が大好きだからな。」

手で垂れ下がる長めの前髪を横へ流しながら、俺はクールをイメージして言った。

すると、それと同時に隣のクラスメイトが吹き出したのが分かる。他にも話が耳に聞こえていた奴らがいたのか、同様声を我慢して笑っていた。

俺の性格でこう言うとは思っていなかったのだろう。

俺は「年上の方との熱い出会いを探してくる！」と言って手を振ると教室の外に駆け出して言った。

教室は笑い声で満ちていた。年上好きなのはネタではなく本心なのだから、そんなに笑わなくても……。外に駆け出したのは眠気を冷ます為だ。出会いは求めてはいない……。くはないです。

。 。 。

自販機の前は休み時間にも関わらず人はあまりいなかった。俺は一枚のプレートをかざすと、何十個もある紙パックの偽造品の中から、カフェオレを選び出す。

五秒もしない内に製品とストローが出てくると、俺はそれを掴んで自販機の横面に背中を預ける。

茶色の液体を口に含むと、フウ、と息を吐く。カフェインが影響

を及ぼすのは一時間後だったか？

ストローを口に咥えたまま、俺は窓越しに見える日の照ったロータリーを眺める。素行が悪そうな奴らが、サボるために裏口に向かうのが見える。

ふと、顔を傾けると廊下の向こうから女子の集団が到来しているのが分かる。真ん中にいるのはどうみても伊藤だ。

まだ手の中の水分は半分は残っている。これをほっぱり出せる程、俺は地球に敵しくなれなかった。

「あ、山原だ。」

気分は不良に絡まれる小心者だ。そのままスルーすればいいものを、と本気で思つると同時に疎ましく思った。

「何だよ…？」

伊藤が話しかけてきた事で、他の二人も俺に興味の視線を投げつけてくる。

「今日バイトでしょ？ウチもだからさ。どうせなら一緒に行かない？」

いつから俺とお前はそんなに仲が良くなったんだ？と聞きたくなつたが、呑み込んで先程の事を話す。

「お前……俺と付き合つてると思われてんだぞ？」

500？の紙パックが少し力を入れた俺の握力により、形を変える。

突き放したい一心で俺はまず、関係をただのバイト仲間にしようとした。俺がそう言くと、少し考えた後伊藤が言った。

「別にいいけど？」

は？と言いたくなる様な返しだった。次に渡そうとしていた言葉は全くの無意味となつて闇の底に消えた。それと同時に他の二人も何故かニヤニヤしている。当の本人は全く気にしておらず、え？と首を傾げている。

その、どういう意味？という疑問を貼り付けた様な顔を見ていると、何故か不公平な感じがしてならない。

かなり久しぶりにオロオロした俺であつたが、その状況は授業前の予鈴により、アツサリと碎かれた。

「じゃあ…授業だしな…先に戻つてるわ。」

俺はまた走り出す。今日は走る事が多いな、と思いつつも俺は、次の授業を受けるにあたって、半分残ったカフェオレの居場所について考えるのであつた。

。  
。  
。

「ではHRを終了します。各自で提出課題は大型端末に送信してください。」

その言葉と同時に、騒がしくなる教室の風景は耳に響き、うざい

事この上ない。

俺はカバンに教科書や携帯を無造作に突っ込むと、ある場所に向かうために教室を早足で出て行く。

「待つてつてば。一緒に行こうよ？」

伊藤瑠璃香……。

「何でだよ？別にもう位置も覚えたし…勝手にわかんねーから、早く行こうと思ってるだけだぞ？」

俺の顔より、少し小さい位置にあるその顔を見つめ、俺は首を傾げながら質問風の切り返しをする。

「だってどうせ行くなら一人で行くより、二人の方が楽しくない？」

どうだろうか…？

普段から一人でいる事の方が断然多く、寧ろ多人数で行動する事が少し苦手な俺にはよく分からない理論だ。

だが、まあそこまで頑なに断る必要はないのかもしれない、ここまで高速で考えると、俺は妥協の意を目の前の女子生徒に示す。

そうして、俺と伊藤はまた一緒にバイト場への道のりを歩いていくのであった。

潜んでいるかもしれないクラスメイトに注意しながら……。

。

。。

「じゃあ接客は――で、次は破損届けね。破損届けは――で、――  
したら、一応直接報告お願い。」

店長自ら、バイトに大雑把な説明をすると、研修証明の為の名札を渡す。

「あと、細かい所で分からないところあったら、瑠璃ちゃんに聞いてね？」

俺はハイ、と返事をすると目に悪い大柄店長のビジョンを頭から追い出し、仕事について考えた。

いや、その前に瑠璃ちゃんって何だよ。変態店長……。

。。

「ふう。」

ファミレスに入った時の青とは違い、日が落ちた事で空を闇が支配していた。

俺はバイトが終了した安心感で軽く、空に向かって白にならない息を吐く。

「それにしても物覚えいいね？あんまり教える事なくてつまらなか

ったよ。」

褒められているのは分かるのだが、素直に喜べないのはどうしてだろう。俺は伊藤の帰宅準備を待ってる間に買っておいた、ジュースの二本ある内の一本を渡す。

「ありがとう。」

満面の笑みを貼り付けて俺に笑いかけてくる伊藤が何だか眩しかった。

そのまま、他愛もない話をしながら家への道を歩く。

二人の家路が分岐点に差し掛かった時、俺は今日の夜ご飯について考えていた。

別れの言葉を言い放ち、伊藤に背中を向けて家に帰ろうとしたが、何故か強めの力で伊藤に腕を掴まれる。

「どうした？」

不自然に思いながら、声をかけるが反応を示さない。俯いたままのその姿。その握力だけでなく、その体の震えが、その場に俺の体を捉えて離さなかった。

もう一度声をかけようとしたが、ゆっくり顔を上げた伊藤の顔は朱色に染まっており、その目には少し涙が浮かんでいた。

「おい…何だよ？本当に…。」

俺が言つと、少し口をモゴモゴさせ、言葉を噛みながら言った。

「いや…そ、そういえばさ！アドレスまだ知らなかったよね？交換しよー。」

いきなりテンションが上がった伊藤に少々訝しさを感じたが、その時は勢いに負けて、気付かぬ内にアドレスを交換していた。

俺は別れを告げて走り去っていく伊藤を見て、訳の分からん奴だな〜と思つたが、その実、面白いとも思つた。

現代では珍しい、『ポイ捨て禁止』と書かれた看板を公園の入り口に見かけた。飲み干した炭酸飲料の缶を手で弄びながら、俺はある事を思いつく。

少し前のグランプリを見た事で高ぶっていた感情を発散するかのよう、手に持つ空き缶を勢いよく空に放る。

意外に高く飛んだ空き缶が落ちてくる時、跳躍すると同時に、体を地面に水平にしながら思い切りボレーシュート。

空き缶はストレートに看板に豪快な音を立てて激突する。

ここから家までの道には残念ながら空き缶のゴミ箱は存在しないのだ。

「たまにはいいだろ？」

俺はまだ衝撃でブレてる看板を尻目に、ポケットに手をつ突っ込むと、少し痛む脚を無視して歩き始めた。



## 第六話（後書き）

” 始まり ” の前にもう一つ話を追加しました。  
そちらもお読みになって頂きたいと思います。

## 第七話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などございましたら、頂けると嬉しいです。  
m

## 第七話

「クソ暑いな……」

俺は机から放射される小型クーラーの風を丁度顔に当たるように調整した。これで外の体育などやったら、楽に死ぬ事ができるな、と明日の三時間目に思いを馳せて、窓越しの校庭を見下ろしてみる。

「確かに、暑いね……」

伊藤がたいして苦しそうにもせず、隣のデスクに突っ伏している。ブレザーは着ておらず、Yシャツ一枚という夏にぴったし+目に良い格好だ。

汗が貼り付き透けたそのシャツを、つい目で追ってしまうのは健全な男子生徒なら当たり前の事だと言える。顔をこちらに向けてきたのを見て、視線を外すのも小心者な俺には当たり前だ。それにしてもピンクのホックが……

窓の外ではスプリングラーがプシュプシュと音を立てて噴射し、砂漠地帯と成り果てたグラウンドの渴きを潤している。

ボーッとしたまま、初夏の目に優しい噴水を眺めていたが、後々飽きてきて今度は暇が心を支配した。

「そういえばさあ。山原はいつも昼どこで食べてる？」

暇は暇でも会話は望んでいない。たいして喉も乾かないのに、口の中がカラッカラになるこの現象。これを引きずってこの女と話すのは少々酷だ。

今日ぐらい黙っててくれ、と目の前の活発系永久機関を諭そうとしたが、それさえ面倒くさくなった。

「宇宙…」

俺は自分でも何を言っているのか分からなかったが、まあ、それでもいいだろう。人生など訳の分からん事ばかりだ。

「……へえー。」

何故か隣から凄いつまらなそうなオーラを感じる。だが、あえて気付かぬふりのスタンスを貫く。

そういえば今は七月に入っただけの下旬だ。それでもこの暑さなのだから、八月に入ったら溶けるな、という嫌な想像と温暖化に本気でムカつく今日この頃。

バイトを始めてから、早一ヶ月。

目当てのソフトの発売は丁度一ヶ月後くらいだ。それまできっちり働いて、当日店頭に並んで買うのだ。遊星の奴が仕入れてくれるかもな、という友を信じる心も捨て難い。

俺は質問してきた伊藤そっちのので、ゲームの世界に降り立つ自分を想像していた。

「で？本当はどこで食べてるの？」

適当に答えたせいか、少々ご立腹だ。俺はと言うと、ゲームについて考えていたからか、とても気分がいいのだが。

「別に普通にランチルームで食ってっけど？」

頬杖をつくと、頭の中に浮かび上がるランチルームのビジョン。

この学校は校則が緩い。学力は平均を少し上回る程度だが、この自由度で皆この学校を受験していると言っても過言ではない。昼はランチルームで購買か、給食。はたまた、教室で食ったり、外で食う事も許されている。

「ランチルームか……何で会わないんだろって思ってたけど、教室でもロータリーでもなかったんだ……」

別に他の奴がどこで昼飯を消費しているか、なんてどうでも良い事だと思う。

「何でだ？」

面倒くさいが何故か気になる。てか、どこで食ってるか聞いたのなら、聞いた理由も付属しろ、と言いたくなる。

「いや…ね…。ウチもたまにはランチルームで食べようかなって思ってる。」

おい…理由になってねーよ…

俺は、休み時間をどれだけ消費出来たかを確認する為に時計に視線を送る。

もう休み時間は終わりそうだ。伊藤も気づいたのか、自分の席に

戻ろうとする。

俺はその背中をボーッと見ていたが、伊藤が振り向いた事で強制的に切り上げられた。

「昼一緒に食べようね？」

それだけ言うと伊藤瑠璃香はまた背中を向けた。

伊藤が席につく前に授業の予鈴が鳴った。昼は基本一人で食べている俺にとって伊藤の申し出は珍しく、新鮮でいいかなーと思わせる説得力が有った。

。 。 。

昼時。

購買でサンドウィッチとカフェオレを買い求める。

給食も弁当もありだからだろうか？購買はどっかの漫画よろしく大混雑になったりと迷惑な事にはならない。

いつもの様に空いてる席を探す。すると、聞き慣れた声が結構な音量で耳に届く。

「山原！ここだよ！」

その声量で呼ぶと、騒がしいランチルームだとしてもかなり響く。それと同時に俺に集まる遠慮のない視線。

俺はため息をつく、呼ばれた方へ昼食を持って向かった。

伊藤の前の席に座ろうとしたのだが、そこには別の奴が座っていた。

「隣でいいじゃん？ここ座りなよ？」

隣の椅子を引いてその座所をポンポンと叩く。俺は何も言わずにそこに腰掛けた。

「てかお前何で、いつも一緒にいる奴らと食わねーの？」

俺はカフェオレにストローを挿入しながら疑問を打ち付けた。

「山原が一人で食べてると思ったら可哀想だね？」

ニヤリと笑ながらムカつく事を大きめの声で言いやがった。

俺は、余計なお世話だ、と言うとサンドウィッチを頬張った。中のレタスがシャキシャキと口の中で音を立てた。

伊藤は弁当だった。中身は意外にまともなのだから不思議だ。

これを口に出したら、ジト目で見られるだろうから自制する。

「何かな？」

俺が見ていた事に気づいたのだろう。俺は口に残るサンドウィッチを飲み込むと、その弁当について問う。

「ウチが作りました。自分で言うのもなんですが、料理得意なんで。」

そう言うと、ミニハンバーグを串に刺して差し出してくる。俺は一口サイズのそれを口に放り込むと、今の言葉が嘘ではない事を理解するのと同時に、目の前の女子を少し尊敬した。

「どう?。」

「……普通に美味しい……」

評価を言うと嬉しそうにはにかむ伊藤。その笑顔に良い意味で鼓動が早まるのと同時に、羨ましいと場違いな事を思った。

伊藤は頭がいい。運動神経も良い。料理も出来る。顔も良い………。

俺は父親の嫌な顔を思い出し、それを振り払うかの様にサンドウィッチを豪快に頬張った。

## 第八話

一週間の疲れを癒す休日。俺は部屋で携帯用ゲーム機の中のキャラを見ていた。

その報告を聞いたのは今朝方起きた時だ。母親がこう言った。

「今晚お父さんが帰ってくるわよ。」

正直言ってしまう。俺は父親が大嫌いだ。俺の親父は頭が良い。有名会社に一年中休みもあり取らず働いている。

これだけ聞くと、尊敬できる立派な父親に思えてくるから反吐が出る。

俺は頭が良い訳ではない。運動神経も…。

俺とあいつは仲が悪い。幼い頃は良かった。父親が帰ってくれば喜んだし、一緒に遊んでもらったりした。

だが、いつからだったろう。あいつが俺に失望の眼差しを向けてくる様になったのは。

久しぶりに帰ってきて顔を合わせれば、勉強や進学校などの事ばかりだった。自分の息子として情けない、だとか、本当に俺の息子か？と言った類の事も星の数ほど言われた。

親への反発心も強く、そこまで才能のない俺と、出来が悪い息子を意地汚い言葉で正そうとする父親との口論は大半が喧嘩へと発展する。

それが嫌で隠れて泣いていた時もあった。母親は一生懸命に俺の事を励ましてくれていた。だが、俺はもう吹っ切れた。滅多に帰ってこないクソ親父の事はいないものとして扱う事にした。

顔を合わせる事もしようとせず、たまに帰ってくるその日に合わせて遊星の家に泊まらしてもらった事も何回もある。

誤解のない様にもう一度言う。俺は父親が大嫌いだ…。

。 。 。

どこにでもある食事風景。だが、その場にいる者の心境はとても普通ではなかった。

俺は母親に頼まれて今日の夕飯の席に座っている。じゃなかったら、こんなクソと一緒に部屋にいるなんて気持ち悪くて考えられない。

何も話さないまま食事をしていく。ただ、早く食い終わり、部屋に帰りたい気分だった。

「学校はどうだ？」

最近では俺が避けていたのを気づいたのか、話しかけなくなった親父だが、この日は勝手が違った。

「普通。」

簡潔に答えを示す。こんな奴と会話するのなんてそれこそ、飯がまずくなる。

だが、そんなに俺を怒らせたいのか、会話を続行する父親。

「お前は今の高校も悪くはないと思ってる筈だ。だがな、やはり俺はお前にもっとマトモな高校に行つて欲しかった。それがお前の為にもなるのだからな。」

どの口でほざくのか、俺は口に入っている食材をお茶で飲み干すと、舌を回した。

「やっぱ世間体が気になるか？あんたが、俺の事を考えてるなんて言うとはな…… 本当不思議だ。」

いないものとして扱う事にしても、やはりム力つくものはム力つく。それにどっちにしろあのまま無視していたら、俺の怒りがピークに達していた筈だ。

「いつにも増して喧嘩腰だな。誰のおかげで、そのバカ高校にも行けると思ってる？」

「喧嘩腰になるに決まってるだろーが。あんたの価値観を俺に押し付けてんじゃねーよ。」

「別に押し付けてなどいない……。俺はお前にちゃんとした大人になつてもらいたいだけだ！」

「うるせーな……。！そもそもちゃんとした大人って何だよ。……。あ

「そうだよな。……出来が悪い俺なんかない方が良くない？ 言  
ってたじゃねーか……。俺なんか生まれてこなければ良かったってな  
」

俺は台を叩くと、玄関から外に出て行った。

。  
。  
。

夜の街を歩いていると店の明かりや、カーライトが思い思いに反  
射して、とても綺麗な物となっていた。

だが、それでも俺のイライラは全く収まらない。逆にそれがヒシ  
ヒシと俺の怒りを刺激する様であった。

少しでも紛らわせようと無造作に自販機に金を入れて、炭酸を適  
当に選択する。

プルタブを開けるとプシュッ！という炭酸特有の開封音が鳴る。

俺は缶を思い切り握りしめ、一気に煽ると喉の焼け付く様な感覚  
を噛み締めた。

（クソ……）

俺はまだたいして飲んでいない炭酸飲料の缶を無造作にゴミ箱へ  
と突っ込む。

また歩き始めるが、俺の頭の中は映像がグルグルと渦巻いていた。  
父親の酷く憎たらしい顔。だが、一番イラついているのはそれを認

めている俺自身だ。何も出来ない非力な存在…。

歩き続けていると、耳障りな大きな笑い声が耳に聞こえた。

コンビニエンスストアの裏では高校生らしき集団が周りの人の迷惑そうな顔も気にせず大声をあげていた。その姿形が、染めた髪や、タトゥーなどから不良の集団だと言う事が手に取るように分かる。

俺は何でも良かったのかもしれない…。それにフラフラとした足取りで近づくと、炭酸を飲んだばかりで調子が悪い喉を誤魔化して言ってやった。

「お前らうるせーんだよ。」

。 。 。

俺は八つと目を見開くと、周りに転がる五人の人間を見つめる。

少し意識が飛んでいたが、問題なく済んだ様だ。

俺は痛む身体を無理矢理動かして、真っ直ぐ歩き出す。口の中に広がっている鉄の味を確認すると、地面に思い切り吐きつける。

べちゃっと水音になったと思えば、地面には点々と血液が赤い紋様を作り出していた。

ボーッとしたまま硬直していたが、取り敢えず歩こうと思い、フラフラとおぼつかない足取りで夜の街を歩いて行く。

すれ違う人々が、俺に驚愕の目線を送ってくるのが見えた。目の

前を見ている筈の視界が突如真つ赤なカーテンを下げた様な景色に変わる。額から流れ出た血液だという事が分かり、これは本気でヤバイかもな、と飛びそうになる意識を必死に現実に繋ぎとめながら考えていた。

何分ぐらい歩いただろうか？いや、何時間かもしれない。

俺は何をするでもなく住宅街の一角にただ座り込んでいた。

俺は何の為に生まれたんだろう。そんな事を本気で思ってしまうから、俺の悲劇のヒーローぶりはたいした物かもしれない。

下に視線を向けると皮がずり剥けている拳にアザばかりの前腕部がハッキリと見えた。

自分がいかにかちっぽけで弱々しい存在かを認識させられる。フッと視線を横に流すと見えた、割れた大きめの硝子のピース。

（俺が死んでも……誰も痛くも痒くもない……。）

硝子の欠片を残った力で、血が出るほど力一杯握ると、俺はそれを手首に押し当てる。

これで終わりだ。つまらない人生だったな……。

「山原……？」

不意に聞こえた声。それは俺が最近、とてもよく聞く声だった。

「ど、どうしたの！？何でそんなに傷だらけ！？あゝと、えっと。取り敢えず動かないでね！」

そう言つと猛烈な早さで走り去って行く伊藤。そして数分後、伊藤は救急箱を持って再び俺の前に姿を現した。

焦っている様な手つきで、勢いよく救急箱を開け放つ伊藤。何に焦っているのか分からなかったので俺は問いかけようとしたのだが。

「げほ、げほ！」

何かが喉に詰まって言葉を発せれなかった。その代わりに吐き出されたのは赤黒い血の塊。

「きゃっ！？ど、どうしよう…。取り敢えず応急処置…。」

伊藤は目に涙を浮かべながらも、俺の怪我の治療をしてくれた。身体の所々に巻かれた包帯が自分で見ても途轍もなく生々しかった。アドレナリンが切れたのか、ズキズキと鈍い痛みを訴える弱々しい身体。

「それで…？…どうしてこんなボロボロだったの？」

怪我を治療してくれた事には礼を言うが、その理由を話すのには少し、喉が詰まった。

「喧嘩した…」

虚ろな眼で本筋を隠し、怪我の理由だけを直的に伝える。

「誰と…？」

まだ俺には少し苛々が残っていた。執拗に俺に踏み込んでくる伊藤を、今回ばかりは無視する事ができなかった。

「関係ねーだろ……！お前と俺は何なんだよ！？お前と一緒に暇を潰したい奴らはいくらでもいるだろーが！？俺なんか放っておけよ！？ただの知り合いだろ！？厄介な奴なんか放って、もっと利口に生きろよ！」

そうだ。俺はこうなんだ。作られかけていた絆も自分で簡単に断ち切ってしまう…。

あとから泣くのもちゃんとわかっているのに…つい見栄を張ってしまう。

でも良いのだ。伊藤は俺とは違う。出来た人間だ。中途半端な俺とは混ぜても綺麗な色にはならない。  
もしも伊藤が光を示す白だったら、俺は闇の黒にもなれない中途半端な灰色で終わりだ。

こんな俺と一緒にいても…なにも…。

「嫌だ！！」

は？

俺は伊藤の言葉に虚ろだった目を見開いた。

「無理だよ！！放っておける訳ないじゃん！？好きなんだよ！！大好きなんだよ！？傷ついてるなら理由を聞かせてよ！？ウチを……いなくていい風に言わないでよ。」

衝撃的な言葉に、苛立ちも自虐的な考えも全て遥彼方に飛んで行

った様だ。しかもその涙を流している伊藤の存在が一番訳が分からず、俺の脳をグルグルとループ状態にさせた。

俺の口からは、伊藤が泣き止むのを見計らって、自分でもあつさりする程、勝手に言葉が出てきた。

自分が昔は頭が良かった事。父親が好きだった事。でも変わってしまった事。自分の下らなさ。

その自分でも恥ずかしい過去と今を、余す事なく全てブチまけた。叩きつけた。醜く、全くもって俺らしくなかった…。

でも伊藤は笑わなかった。何も言わずに俺の背中に手を回してくれた。

それが心地良かった。

俺が欲しい物を掴もうとする手は、いつも虚しく空を彷徨っていた。

それが俺なんだと諦めていた。

俺は少し、震える手で伊藤の背中に手を回してみた。その手は確かに、体温を宿す目の前の身体に触れていた。

少しそれを抱き寄せると、俺はいつもの後ろ結きではない伊藤の髪の毛に顔をうずめてみた。

最近鼻に慣れた良い香りがして、それは驚く程俺を安心させた。

不意に涙腺が悲鳴を上げた。  
喉が意思と関係なしに、しゃくり続け、ついには我慢する事をやめた。

とりあえず人並みに強くなろうと思った。

とりあえず大切な物が出来た。

とりあえず…目の前の生まれて初めて俺を好きだと言ってくれた娘を…もう泣かせたくはないと………そう………思った…。

## 第九話

「なあ………？」

伊藤と一緒に、何時もより近い位置で肩を並べながら、座り込んで夜空を眺める。今の俺とこいつは第三者から見てどの様に映るのだろう。気になるところだ。

「ん？」

二人とも力が抜け切っていた。それは揃って泣き腫らした事による所が大きいだろう。夏だとはいえ、少しばかり寒い風が吹き付け、俺の体を蝕む。

「……………星が見えるな……」

今日はとても晴れていた……雲の浮かばない夜空に光る粒が瞬いては俺の心を刺激する。

「何それ……？」

結局は主観か……それとも本当にこの星は俺だけに見えるのかもしれない……なんせ、頭痛が酷く、意識も正直朦朧としていて頼りない。

「……………なあ………これからもそばにいてくれるか……？」

自分でも不思議なくらい簡単に言葉が出てきた。俺は自分のセリフに頭に疑問が浮かんだ。もしかしたら、今の俺は少しおかしいの

かもしれない。

「蒼樹が、そばにいてくれるなら、ウチもそばにすることにする。」

「……何だそりゃ？」

てか、いきなり呼ばれる頻度が低い名前で呼ばれたから一瞬、こいつは誰と会話してんだ？と寒気がした。

「……………」

恥ずかしいなら言わなければ良いのに……。真っ赤になった伊藤の顔から視線を外してもう一度空を眺める。

「じゃあ俺も…瑠璃香がそばにいてくれんならさ……そばにいるよ……」

俺の心をあれ程、焚きつけた星はもう見えなくなっていた。

「これからよろしく。」

会話が途切れたからだ。俺はもう一度…確かめる様に言った。

瑠璃香は少し笑うと、ワザとらしい咳払いをして、ハッキリと耳に聞こえる声質で言った。

「こちらこそ。」

「じゃあ今月分も口座に振り込んだから。」

ぽつちやり系店長はお疲れ様、と言ういつもの様に事務室の奥に入って行った。のしのしと効果音が聞こえそうな歩き方をする店長は今年で30歳だ。

事務室の奥で何をするのかは、あの腹を見てもらえば分かる筈だ。

俺は立ちすくんだまま、店長の言葉を反芻して、3日後に発売されるFLOに思いを馳せていた。

「帰ろ？」

暫く佇んでいると、瑠璃香が鞆を肩に掛けながら俺の隣へと歩いて来て覗き込む様にして言った。

俺は軽く返事をする、台の上に置いておいたスクールバッグを掴み、外へと歩き出した。

バイトで疲れたからだ、早足で店を出ようとする俺に、可愛い彼女が、待つ様に言ってくるが俺は気にしないでドアの外を目指す。

。 。 。

現在は夏休みだ。肌を焼く、7月上旬の日差しをベランダにて体全体に浴びる。

清々しさを感じると、力一杯伸びをして、体に少しの喝入れ。予想通り、背骨がポキポキと音を立て、気持ち良さが脳を支配した後、

脱力感が体全体を襲う。

ベランダから見える景色は朝霧がかかった街道。社会人が、時計を気にしながらキビキビとした態度で歩いているのが見えた。

FLO発売は明後日だ。最早あれ程夢見た光景もまじかまで迫って来ている。予約受付の無いFLOに俺は少し、面倒くさがったが、並んで苦勞して手に入れるのも悪くはないとプラスに考える事に。不意に震えたポケットに意識が引つ張られた。俺はそれを親指と人差し指で掴んで引っこ抜くと、携帯の着信履歴を確認する。

メール送信者の名前欄の場所には『瑠璃香』としっかりしたデータ文字で映し出されていた。

俺は画面を親指で何回かタッチし、メールの回覧をする為、指で画面をスライドさせた。

文面は何でもないものだ。今度、つい最近オープンされたテーマパークに二人で行こう、と言ったもの。

俺はOKと返すと、瑠璃香と二人で笑いながら歩く道を想像した。

「…悪くないな。」

ベランダから中にはいると、途端に草のざわめきや、鳥のさえずりは消え去り、沈黙と表す静かな空間が広がる。父親はいつものように仕事に。母親はまだ、下の階で寝ているはずだ。

兎に角、クーラーの効いた涼しい自分の部屋に戻る為、予定通り一階の冷蔵庫から飲み物を拝借してきた俺だった。



## 第十話

昔から、一部を除いて誰にも嫌われる事などなかった。

勿論、喧嘩などとした事ないし、自分と話した人は皆笑顔になってそれが自分にとっても嬉しかった。

悪口も女子はともかく、男子には一度も言われた事はなかった。日々を誰に対しても笑顔で送る毎日。

何時もと雰囲気の違いの教室。女友達の軍団に入り込んでいる時に、こんな話を聞いた。

「やっぱりさ。海飼は顔良いよね。」

「確かに！性格も良いしね。」

「でも彼女いるらしいよ？」

えゝ、と女子達の声が届く。

海飼くんは、女子生徒に人気のある、爽やか系サッカー部員だ。テンションが高くいつも笑ってる。

「でもさ。あたしは案外存在感が薄いけど、アオ君もかっこ良いと思うんだよね、どう！？」

アオ？あまり聞いた事の無い名前だった。

そのまま知ってる風な感じを装いながら、女子達の話聞く。

「やっぱり！？あたしもかっこ良いと思ってた。結構無口だけどね。話してみると面白いし。」

「クールだよ。そういえばあたし見たんだよ。アオ君ね。前に大型のバイクに跨ってコンビニの前で友達待ってた。」

乗せて欲しいな、などと夢を語っている。それにしても高校一年で大型って？不良じゃん。

「出てきた友達もかつこ良くってさ。金髪だった。」

女子達はキャピキャピと大丈夫？って思える程のテンションで話し合っている。

「瑠璃は！？アオ君どう！？」

一人が自分に話を振って来たことで、みんなの視線が集まってくる。

「あ、そういえばさ、アオ君って何組だっけ？」

顔も知らない人をかつこいって言うのは何となく……気が引けるというかね。

「？何言ってるの？」

「え？」

「同じクラスじゃん？」

「……え、あ、そうだったね！ごめんごめん、何か頭がこんがらがっちゃって。」

「ふうん、そつか。」

まさか同じクラスとは思わなかった。海飼君は、三組で隣のクラスだし、それに影響されたかもしれない。

それにしてもアオ君と呼ばれる人物を自分は全く知らない。聞いたこともない。アオ君？アオ君……ううん。

授業のチャイムが鳴ると、今まで外にいていた人たちがゾロゾロと教室に入ってくる。その時は授業が始まるので、謎のアオ君の事は忘れ、座席に座って準備を始めた。

。  
。  
。

「あ？やば。」

「何が？」

自分がつい出してしまった言葉で連れに関心を向けられる。今は帰る途中であり、校門を出たすぐのところだ。

「書類課題忘れちゃった……ごめん、先帰ってて、取りに行ってくる。」

友達に別れを告げると夕日が照らす校舎に向けて駆け出す。

。

。。

「はあ、はあ。」

ここまで全力疾走で走って来たからである。肺が酸素を求めている。

途切れ途切れの呼吸を整えながら、ウチは一年二組の教室のドアを開けた。

教室は、水曜日である為部活も休みでグラウンド、校舎と同じく静けさが漂っていた。

窓から爛々と射し込む夕日が、教室を色鮮やかに紅色に染めている。

忘れ物忘れ物、と呟きながら教室の机を目指す。デスクの中を漁っていると、目当てのプリントノートを見つけることに成功した。

教室の外を見るため、窓の方に目を向けた時だ。夕日の眩しさで気付かなかったのだ、一人の男子生徒が椅子に座って窓の外に顔を向けているのが見えた。

自分から見えて、窓の間に位置しており、その顔は見えず、ブレザーを着た少し遅い背中だけがウチの眼に映っていた。

（誰だろう？）

自分の好奇心に当てられて、その顔を一目見ようと歩いて行く。話しかける事に躊躇いを持ち、少しの接触を試みた。そして、ついにその肩に手が触れようとした時、低めの声が耳に聞こえた。

「何か用か？」

ウチはついビクツとなつてあたりを見回したが、目の前の男子生徒が出した声だと言うことに気付くと、慌てて質問の返し方を考える。

「いや、えーと…こんな時間に椅子に座つて、何してるのかなーと思つて。」

ウチが言つと、ゆっくりと振り向く男子生徒。その顔は整つており、元々は愛嬌のありそうな顔をしているが、長い真っ黒の髪と、作っているのか、あまり人を寄せ付けないキリツとした瞳のせいで、クールで冷徹なイメージを醸し出している。

「別に……空を見てただけだ。」

「へえー……えつとさ。」

「てか、お前誰だ？」

「は？」

「見たことない顔だ。」

そういえば、ウチの方もこの人の事は知らない。こっちは何か見た事がある様な気がするのだが……。

「えっと…ウチは…てか君は何組？」

とりあえず組については、聞いておきたいと思った。なぜ、他組の人がこの二組にいるのだろう、と思ったのと、あとは何となくだ。

「一年二組、このクラスだ。名前は山原蒼樹。」

このクラス。その言葉を聞いた時、ウチは嘘だろと声を出しそうになった。

「ウチもこのクラスなんだけど…。」

「は？」

「えっと…名前は伊「ああ、いいや。どうせ名前なんか聞いても覚えられない。俺とお前はここで偶然会っただけだ。無理に友好的に接する必要はないだろ？」

第一印象は失礼な奴だなろと思った。ウチは顔は良いらしいのだから、少しは嬉しそうにしろ！というのも本気で思った。

それ程に興味のなさそうな目をしていた。

「じゃあな。」

俯いていると、不意に廊下へと続くドアの所から声がした。

ウチは呼び止めようとしたのだが、廊下へと出ると謎の男子生徒は煙の様にいなくなっていた。

。 。 。

次の日は、失礼な男子生徒を見つける事に成功した。友達にその人について聞いて見ると…。

「何々？アオ君に興味あり？瑠璃香もやっぱり年頃の女子だね」

と、ニヤニヤしながら言われたから、少しイラっとした。

それにしてもアオ君はあの人の事だったのだ。ずっと見ていると気付いた事だが、あの人はいつも寝ている。休み時間は何処に行ってるんだろう？と思ったが、自販機の所で飲み物を飲んでいる事が判明した。

何故いつも一人なのだろう。山原のその一人で休み時間を、浪費している姿はとても飄々としたもので、こうみると確かにクールなイメージだと思った。

そのまま、家に帰っても、ご飯を食べてる時も、ベッドに横になっっている時も、ずっと山原の事について、考えていた。

どうしてだろうか？何故か胸がムズムズして、寝付けないし、勉強にも集中出来ないのだ。落ち着かなくて、何だかやるせない…。もしかして…自分は…

…毒を盛られたのだろうか？……それはないか…。

ウチはゲーム機の前でコントローラーをカチャカチャさせながら調子の悪い体を誤魔化していた。

。 。 。

また次の日、今度は係りの仕事のために、クラスから書類課題の収集をしなくてはならない。ウチはHRで教室の前に出て皆に公言した。

そして、集めている時、あの人が近づいて来た。少し緊張したが、問題なく受け取る事に成功した。そして、課題を見てみると、とてもわかりやすい様にレポート用紙に文字の羅列が並んでいた。

凄いな〜と思い、それを本人に言ってみる事に。

「山原って字凄く上手いね？」

普通に褒めてみるが、反応を示さない。ああ、と端的に言つとまた自分の席へと戻ってしまう。

何となく、負けた気がしたので、もっと踏み込んでみる。

「ねえ？山原って何か部活やってんの？」

「あ〜？お前かよ…。別にやってねー。」

「じゃあ、何か習い事は？」

「やってねー……。」

「好きな食べ物？嫌いな食べ物？」

「好きな食べ物は雪見大福…嫌いな食べ物はパルム……っておい。いきなりなんだよ？」

「どっちもアイスじゃん。じゃあ、好きな女性のタイプは？趣味は？」

「…おい……えっと、好きな女のタイプ？特にはねーけど強いて言うなら年上のリードしてくれそうなお姉さん。趣味はゲーム。」

それを聞いてつい笑ってしまった。

「その顔で年上？笑えるんだけど。」

そう言つと、もういいか？と言つてため息をつき、立ち去ろうとする山原。

「ちょっと待って！」

「あ？はあゝ、まじで、お前何なんだよ？早く帰りてーんだよ。悪いが他の奴で笑ってくれ。」

どうやら、年上好きを笑われた事に少し、傷付いてる様だ。案外可愛い所があるな、と場違いな事を思った。

「じゃ。」

そう言つて教室から出て行つた山原。

自分は名前を二回も呼んだのに向こうは一度も呼んでいない、そ

の事に若干不公平だと思ったのは間違っているのか？

（よし…決めた。いつか、絶対名前を呼ばせてやる！！）

教室から見える、廊下の一人っきりの山原の背中を見ながら、  
チは1人そんな事を考えていた。

## 第十一話

人々の喧騒は一筋の線を辿る様にして、約250m先まで続いている。本日は言わずもがな初VRMMO、Fairylandonlineの発売日前日の夜だ。

今は深夜12時であり、ガードレールに座っている俺の隣の人物は目が虚ろで、その状態異常が手に取るようにわかる。隣の人物は早寝早起きがモットーであり、この時間帯では不規則にフラフラと首をかしげている。

「だから、後で買いにくれればいいって言ったのに。」

瑠璃香は俺の言葉にほえ？と口を開けると、薄く開けた目で俺の事を見る。今は普段の制服と違い、ホットパンツに、中が有名なスマイルマークのＴシャツで上に白いパーカーという夏に見合ったラフな格好だ。

俺は黒いチノパンに、中に白と紫のストライプのＴシャツ、上が薄い生地 of 黒いカーディガンを羽織っている。

俺は必死で瞼を下げまいとしている瑠璃香を見て、少しため息をついた。

前方に並ぶ人の数はあまり多くなく、俺達が比較的早く並び始めたのがわかる。

こういう事になった経緯は大したものではない。

俺はまず遊星に電話するとFLOの有無を確認した。長田ゲームショップはどうやら、一本しか仕入れなかったらしい。

考えて、絶対的に遊星のものが…

話がずれたが、さつき瑠璃香に言った通り、FLOは別に後で買いに来てもなんら問題はない。

元々オンラインゲームであり、プレイする人の数がゲームのやりこみにそのまま作用する。生産数は多く、少なくとも500万は出すと言われている。

500万本と言われればかなりの数に聞こえるがこれは別段大した事ではない。

それは今の日本人口が2億3000万人という事が大きく関係している。

実際少子高齢化になると予測されていた日本の未来は、突如大きく変わった。

子供を生む人がなくなってきた時代で、いきなり子供の数が増えたのだ。

多分だが、金の少なかった日本が政策により、国債取り消しまでこぎつけられた事による所が大きい。

税が極端に上がったが、その分医療費や、国立などは例外なく安価になった。

始めは国民も税の上昇に文句ばかりだったが、ものの見方を変えると、納得した様だった。

人口が増えれば商売の幅も増える、という事だ。

それと後で買いに来ても大丈夫、というのは例外なく、FLOの

データベースからオンライン接続してある全機、VRHWに情報が一斉送信されるからだ。

この一斉送信は最後のソフトウェアアップデートと連結しており、現在のバージョン12.2からの回線接続前、最後のアップデートとなる。

まあ、ようするにこのGameStartProgramによるHWへの一斉伝達が行われないと、どっちにしろゲームをプレイする事は出来ない、という事だ。

そこまで考えると、俺の肩にちょこんとした衝撃が伝わった。何事？と思い、首を回して見てみると、そこにあっただのは瑠璃香の端正な顔だった。

スースーと寝息を立てて気持ち良さそうに俺の肩に頬をすりつけてくるが、それが何だかとてもくすぐったかった。

起こそうと思ったが、やっぱり放っておく事に。そのまま瑠璃香の頭を少し撫でるとサラサラの髪が僅かに動く。

三枚重ねUMDとパッケージを見たいから、早く夜が明けないかなという思いを持つ自分と、このままずっと瑠璃香の寝顔を見ているのもいいかもな、と思う自分。

どちらも呆れるくらいに本物で、嘘偽りのない綺麗過ぎる思いの塊だった。

## 第十二話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などございましたら気軽に記入して下さい。  
m

## 第十二話

俺はあるゲームの説明書を黙々と読破しながら、アスファルトが暑さを取り込む夏の道路を歩いていた。

「フア〜」

俺の隣に行く瑠璃香が盛大な欠伸をする。現在は、土曜日の12時20分だ。昼前になり、腹も空いてきたという事で、俺と瑠璃香は一緒に何処かのカフェにでも行って腹を満たそうと考えた。

駅前の大型電気機器取扱店を出て、CDレンタルショップ側に歩いて行く。

今は夏休みだが基本は平日という事もあり、仕事なのか、ティッシュを配ってる人やスーツ姿で携帯を耳に当ててる人などが見受けられる。

歩行者道路を歩いて行くと、同様に夏休みで浮かれているのか、子供達がチャリンコを漕ぎながら楽しそうに笑っている。

「早くやりたいね〜?」

瑠璃香が大きめのUMDケースを指差しながら言う。正式にゲームが始まるのは明後日の朝10時30分だ。

敢えてゲーム開始を日曜日に設定したのは、運営側の良心と見てまず、間違いない。

胡散臭い英語の看板を立ててるカフェ。その店内に入ると、外と

はガラス越しにも透き通ってよく見えた。

店内の椅子に座り、伊藤と真正面から向き合つと、何でも下らない話をする。

伊藤がパスタ、俺がフレンチトーストを頼んでオーダーすると、店員は行儀良く頭を下げたあと、少し待つように言った。

「そういえばさ？このゲームのタイトルあるじゃん？Fairy Land Online『Another Gaiia』。」

瑠璃香が早めにきたカプチーノを飲みながら言ってくる。

「ああ、タダでさえ名前が長かったのに、リメイク版で最早救いようがなくなったな。」

「確かに長いよね…。でもそうじゃなくて、”Another Gaiia”は、”もう一つの大地”って意味でしょ？」

カプチーノの泡が形を崩しているのが見えた。

「ああ。」

「じゃあさ？”Fairy Land”はどういう意味？”妖精の土地”であってるの？」

瑠璃香が首を傾げているのを見て、それは自然にやってるのか？と聞きたくなった。

「大体あってるけど少し違う。普通にFairyは妖精で、Land

dは土地であつてるけど、FairyLandって書いて一応”御伽の国”って読むんだ。」

俺が話してる途中に来たフレンチトーストに、ミルクをタップリ垂らしながら言う。

「へー、御伽の国かぁ。ロマンチックだなー」

俺は確かにな、と返すと口いっぱいパンを頬張る。一口サイズにカットされたパンはメイプルシロップが染み込んで、重めの甘味を感じさせるが、別段気にならない程美味かった。

「いるか？」

フレンチトーストを指して言う。すると、瑠璃香は少し驚いた顔をしたあと、うん、と力強く頷いた。

食べた瑠璃香の幸福そうな顔を見て、好評だな、と少し嬉しく思う俺。

「もう少しだな？楽しみか？」

俺が言うと、クエスチョンマークをあげる瑠璃香。

「楽しみなのは、ウチじゃなくて蒼樹の方でしょ？」

瑠璃香がニヤニヤしながら訳の分からん事を言ってる。

「俺が言ったのは、パスタの事なんだけど？」

そう言つと、ようやく気づいたのか、なーんだ、と言ってお絞りで手をこまめに拭き始める。

「英訳は”計画しなおす”か……初めからVRMMOで、出すつもりだったのかもな……」

俺が独り言を言つと、反応を示す瑠璃香。パスタを持って来た店員さんを尻目に俺の目だけを見て何が？と聞いてくる。

俺は何でもない、と手をかざして言つと、フレンチトーストに付属しているチェリーを静かに口に含んだ。

## 第十二話（後書き）

第零章 now install 終了です。

ここまでお読みになってくれた方々に感謝の気持ちでいっぱいなのと、申し訳ない気持ちもあります。

基本的にじっくり書こうと思っていたので、結局14部投稿でVRMMOらしき物は第零話の一つだけになってしまいました。

ここまで退屈な感じがあったと思いますが、次回からはようやくゲームがスタートします。これから暇潰しにご覧になってくれるとありがたいですm(\_\_\_\_\_)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0901x/>

---

NOW Loading.....

2011年12月22日00時55分発行